

地方より

札幌から

「但し北海道を除く」とは、從來の農村問題を取扱つた人々の、從

北海道農村の取扱い方であつた。

確に一見新天地の北海道は、如何にも近代的な農村社会が展開してゐてかの如くに見える。目を過かず大平原、泰西の古城を思わせる赤レンガのサイロ、点在する赤い屋根、緑の屋根の農家、そして茲々草を喰む乳牛の群E・T・C。しかしながら、同一国民社会、國民經濟の中にもつて、どうして北海道に於いてのみ独自な農村社会の展開が見られる筈があろうか。確かに聚落立地や、歴史的条件や、生産型態等こそ異つてゐるが、やはり基

本的には北海道の農村も結局日本の農村なのである。日本農村を問題とする際に、一応北海道を除外して論することは、それ相応の理由のあることであるが、北海道農村社会の成立展開の条件と法則の相對的獨自性を認識した上で、更に府県農村社会と同一の場所において、広く日本農村社会を論じてみると、それは、我々北海道在住の農村社会研究に従事するものの念願である。所謂“日本資本主義と農業”なる視点から云えば、歴史的狹義物を含むことが少いだけに、より純粹に、より明確にその間の関連を抽出することが出来ると言ふ。

この点に関して、最近民科札幌支部歴史部会の“農村共同体の基礎理論”農業部会の“北海道に於ける農地改革の評価”の討論会や農村省研北海道支部主催の研究会における“地代論”“所謂經濟外的強制”“土地資本”等の共同課題による研究会は、研究のレベルはともかくとして、北海道農村社会研究の将来を暗示する。大なる意義を持つものと云うべきである。たゞ我國農村社会学界の大先達、北大教授の鈴木栄太郎博士は、依然として病床にあり、またその研究の視点も近来は都市社会に指向され、(近く公刊を予

定されている)“都市社会学”に関する著作は斯学に時期を劃すべきものと予想されていいる。同研究室の研究動向が農村から離れていくことは農村社会学界にとって一抹の淋しさを与えている。

(東谷清次)